

ネクロポリス・テーベ研究

—エジプト、ルクソール西岸アル＝コーカ地区、第11次調査—

近藤 二郎 早稲田大学文学学術院・早稲田大学エジプト学研究所教授

Study of the Theban Necropolis: The 11th field season at al-Khokha area on the west bank of Thebes

KONDO, Jiro Director (Professor), Institute of Egyptology, Waseda University

1. はじめに

2007年12月に、エジプト・アラブ共和国ルクソール西岸アル＝コーカ地区で新王国第18王朝アメンヘテプ3世治世末期の高官ウセルハト墓(TT47)および周辺の岩窟墓群の調査を開始した。毎年、冬季に発掘調査を継続し、2017年12月23日から2018年1月15日にかけて第11-1次調査を、そして2018年3月3日から3月13日にかけて、コンスウエムヘブ墓(KHT02)内部壁画の保存・修復作業を中心として第11-2次調査を実施した。

本調査は科研費・基盤(A)海外学術調査・課題番号・15H02610「エジプト、ルクソール西岸の新王国時代岩窟墓の形成と発展に関する調査研究」研究代表者・近藤二郎(早稲田大学)の補助金で実施された。

調査対象地域であるアル＝コーカ地区は、ルクソール西岸のアル＝アサシーフ地区とシェイク・アブド・アル＝クルナ地区との間に位置する。私たちはアメンヘテプ3世治世末期に造営され、1902～03年に地元の有力者(オムダ：村長)によって調査が実施されたウセルハト墓(TT47)の再発見・再発掘を実施し、ウセルハト墓の正確な規模と構造を明らかにすることを目指した。第2次調査時に精緻なレリーフ装飾を施した岩窟墓の入口上部を検出した。入口上部のレリーフの図像は、ケルエフ墓(TT192)のレリーフの図像と酷似したものであった。また、奥室の内部の調査により、その規模と構造が大きく異なっていた。また、ブリュッセルの王立美術歴史博物館に所蔵・展示されている王妃ティイのレリーフ(E.2157)が、前室奥壁にかつて存在していたことも判明した。

第7次調査が実施された2013年12月末にウセルハト墓の前庭部南側で、新たに2基の岩窟墓(KHT01

とKHT02)が発見されたが、南に位置するKHT02の前室内部には壁画と碑文が良好に保存されていた。被葬者は、新王国のラメセス朝期に属する「ムウト女神の工房長」、「ムウト神殿のビール醸造長」の称号を持つコンスウエムヘブであった。また、墓の前室北壁には、被葬者を中心に、妻(ムウトエムヘブ)と娘(アセトカー)の3体の家族の座像が作られていたが、西側の妻の座像は大きく破壊されていた。また、コンスウエムヘブの左側に座るアセトカーは、ムウトエムヘブの実の娘ではあるが、コンスウエムヘブの実の娘ではなく、墓内部の別の銘文からも、アセトカーを表す際には彼女の母親のムウトエムヘブの娘という意味で、「彼女の娘(s3t=s)」と記されており、ムウトエムヘブの連れ子であったと推定できる。

さらに、第10次調査の実施された2017年1月には、ウセルハト墓の前庭部の北東隅において、「王の書記」の称号を持つ新王国ラメセス朝期の「コンスウ」という人物の墓も新たに検出されている。

2. 第11-1次調査

第11次調査は、2017年12月23日に開始した。前年度(2016年度)の第10次調査が、これまでで最も長期間にわたる発掘調査であったが、第11次調査では、ウセルハト墓(TT47)前室南西部の上部に堆積した砂礫の除去、および前年度に一気に掘り下げて検出したコンスウエムヘブ墓(KHT02)の入口前の前庭部の南側部分の堆積砂礫の除去を実施した。また、こうした堆積砂礫の除去作業と併行して、コンスウエムヘブ内部壁面の保存修復作業、KHT01墓とコンスウエムヘブ墓(KHT02)内部の岩盤の補強などを行った。

ウセルハト墓の前室上部の堆積砂礫とコンスウエムヘブ墓の前庭部南側の堆積砂礫の除去作業では考古省

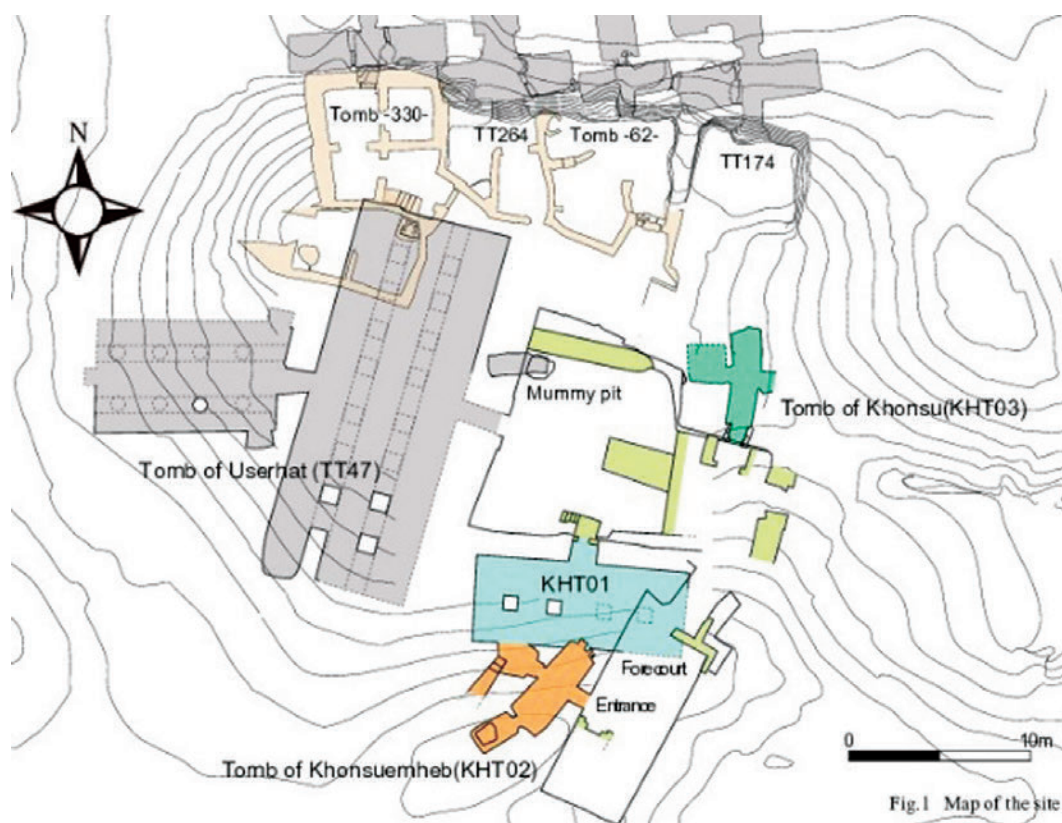


図1 ウセルハト墓(TT47)および周辺部平面図

の査察官の指示で斜面に石積みの壁を築き、上部斜面の崩落を防ぐ処置をとった。

ウセルハト墓前室上部の堆積砂礫の除去作業は、ウセルハト墓を覆う膨大な量の砂礫を除去することにより、将来のウセルハト墓の保存修復・復原作業に備えて実施された。前室上部の堆積砂礫は、大きく二層に分けられ、上層からはラメセス朝期(第19・20王朝)の土器片、植物性刷毛、プラスター入容器等が出土しており、付近に存在するラメセス朝期の墓に由来する堆積物と見られる。また、下層の石灰岩チップ層から出土した土器片の大部分は第18王朝後期のもので、木槌やプラスター入容器、青色または緑色の顔料等も見つかっており、ウセルハト墓の造営時の堆積と考えられる。砂礫除去作業で前室南側天井上部の岩盤部分でモルタルを含む石灰岩製の壁体が発出された。この壁体は、ウセルハト墓(アメンヘテプ3世治世末期)よりも前の時代のものであると思われ、壁体の南側に未発見の岩窟墓の存在が想定されている。

コンスウエムヘブ墓の入口のある前庭部は、矩形を呈するが規模から判断して、コンスウエムヘブ墓(KHT02)の元来の前庭部ではなく、別の岩窟墓の前庭部に穿たれた小岩窟墓であると考えられる。そして、この前庭部の南西端に本来の岩窟墓が存在していると

見られ、位置から考えてトトメス4世時代の岩窟墓である可能性が高い。堆積砂礫の除去作業で発見された主要な出土遺物としては、木棺破片数点、カルトナージュ製ミイラ・ボード片数点、ウジャト眼を象ったファイアンス製護符、そして木製や未焼成のシャブティ像などがあるが、いずれも第3中間期に属するものである。その他、新王国時代の遺物としては、葬送用コーン、木槌、ヒエログリフのスタンプが押印された封泥、土器等がある。

3. KHT01 と KHT02 墓の補強作業

第7次調査で新たに発見された KHT01 と KHT02 内部の岩盤の質は脆く、大きな亀裂等もあり早急な補強が必要であった。まずコンスウエムヘブ墓(KHT02)にアクセスするために使用していた KHT01 は、天井部の石灰岩が脆く、崩落の危険性があったことから、安全を確保するために鉄製アングルで箱状の構造物を作り設置した(図2)。次にコンスウエムヘブ墓前室北側の石灰岩製の被葬者コンスウエムヘブの家族の3体像の倒壊・崩壊を防ぐために、焼成煉瓦と白色セメントで一時的な壁体を設置した。この処置は一時的なもので将来的には、鉄製の支柱などを像に通して固定する方法などが検討されている。

また、コンスウエムヘブ墓前室で、墓内の保存修復作業を実施する前に北側半分の堆積砂礫を除去し、木製の床面を設置した。

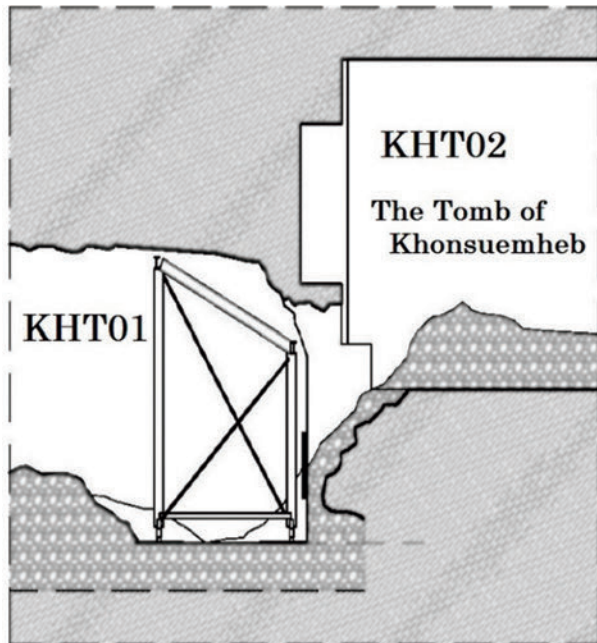


図2 ウセルハト墓(TT47)及び周辺部平面図

コンスウエムヘブ墓内部では、前室の北側部分を中心として、天井及び壁面の強化や壁画の保存修復作業を実施した。また、岩窟墓の外側の岩盤の強化も行った。

ところが、コンスウエムヘブ墓入口付近の壁面の修復作業中に墓入口の内側で、壁の一部が崩落したため、急遽、考古省西岸事務所と協議をし、予定を変更して、2018年3月に第11-2次調査として緊急の崩落防止作業を行うこととなった。そのため、2018年1月にコンスウエムヘブ墓前室東壁の北側部分の壁画を保護し、壁面が崩壊しないよう、木製支柱で固定した。また、コンスウエムヘブ墓の入口部分に鉄製アングルで保護用のフレームを設置して、入口上部の崩落に備えた。

4. 第11-2次調査

2018年3月3日から約10日間実施された第11-2次調査は、コンスウエムヘブ墓の前室内部の壁面及び天井の保存修復作業のために実施された。保存修復作業を行った場所は、北壁の3体像、前室北側の東壁・西壁、北側の天井部のプラスター面と岩盤とを固定する作業を実施した。またコンスウエムヘブ墓の前庭部に面する外側、入口北側の岩盤表面が脆く剥落してしまうために、岩盤表面の強化作業を施した。



図3 ウセルハト墓の前室・東壁(北側)



図4 ウセルハト墓の前室・北壁(3体像)

2018年3月の第11-2次調査の保存修復作業は短期間であったが、コンスウエムヘブ墓の前室の壁や天井部の彩色面を保護することで、当面の内部壁体の崩落・崩壊を回避することができた。

5. 前室天井に描かれたモチーフ



図5 ウセルハト墓・前室天井(北側)装飾

KHT02 墓の壁面に描かれた壁画や碑文から、この

墓の年代は新王国ラメセス朝期(第 19・20 王朝)のものであると判断された。しかしながら、前室天井に描かれているモチーフを詳細に観察すると、これらのほとんどのモチーフは、ラメセス朝時代に一般的なものではなく、新王国第 18 王朝の後半(トトメス 4 世時代～アメンヘテプ 3 世時代)の岩窟墓の天井に良く描かれるモチーフである。

これまでのコンスウエムヘブ墓内部での壁面の顔料分析等によると、天井部と壁面の顔料の差異は認められていないが、天井の「ブドウ文」、「過状文」等から、コンスウエムヘブ墓は当初、第 18 王朝後期(トトメス 4 世～アメンヘテプ 3 世治世)に造営された岩窟墓をラメセス朝期に再利用した可能性も存在すると思われる。

コンスウエムヘブ墓の東側の長方形の平面プランを持つ前庭部は、入口外側の南側や前庭部北東部にある日乾煉瓦造の構築物が存在しており、この前庭部南側に存在すると考えられる岩窟墓も含めて、前庭部をクリーニングすることでこの部分の岩窟墓の造営過程を明らかにしたい。

■参考文献

- ・近藤二郎・吉村作治・菊地敬夫・柏木裕之・河合望・高橋寿光・福田莉紗・米山由夏「第 10 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報」『エジプト学研究』第 24 号、2018 年 3 月、11-35 頁。
- ・近藤二郎・吉村作治・菊地敬夫・柏木裕之・河合望・高橋寿光・福田莉紗「第 9 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第 23 号、2017 年 3 月、4-36 頁。
- ・近藤二郎「ブリュッセル、王立美術歴史博物館所蔵の王妃ティイのレリーフ(E.2157)」*WASEDA RILAS JOURNAL*、No.4、2016 年 10 月、7-15 頁
- ・近藤二郎「テーベ西岸の岩窟墓におけるアマルナ時代直前変化」『史観』117 冊、2016 年 3 月、81-97 頁。
- ・近藤二郎・吉村作治・菊地敬夫・柏木裕之・河合望・高橋寿光・竹野内恵太・福田莉紗「第 8 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第 22 号、2016 年 3 月、113-148 頁。
- ・近藤二郎・吉村作治・河合望・菊地敬夫・柏木裕之・竹野内恵太・福田莉紗「第 7 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第 21 号、2015 年 3 月、19-44 頁。
- ・近藤二郎「テーベ私人墓第 47 号」、『エジプト学研究』第 2 号、1994 年 3 月、50-60 頁。
- ・Kondo, J. and N. Kawai, "Discovered, lost, rediscovered: Userhat and Khonsuemheb," *Egyptian Archaeology*, 50, Spring, 2017, pp. 22-26.